

紅葉台



新聞

第108号

2023年

12月16日

発行人：関谷 孝

愛犬マルコの闘病記

今年の7月、咳がひどくなった。24時間ずっと「カ、カ、カ、プハー」と何度も繰り返す。これは異常だ。苦しそうにしているのので、早速ネットで調べる。すべての症状に当てはまったのが「フィラリア」。これはかかったら最後、治らない。酷くなると命に係わる難解な病気だった。フィラリアは蚊が媒体する病気で、蚊に刺された時にフィラリアの幼虫がいると血液に入って寄生する。最後は心臓や肺血管にたどり着きそこで寄生虫に育って血流を阻害する恐ろしい病気だ。かつて犬の寿命が短く5歳からせいぜい10歳ぐらいだったのはその治療薬がなかったからだ。1981年ノーベル生理・医学賞をとった大村智氏がイベルメクチンを開発し、予防薬となった。そのおかげで今では不治の病ではなくなった。蚊が出る時期にこの薬を毎月1錠飲むことで寄生虫を殺すことが出来るからだ。市販では買えないので獣医さんの所に買いに行かなくてはならないのが面倒だった。今更そのことを悔やんでも遅い。最近では飲ませてなかった。蚊と言ってもすべての蚊にフィラリアがいるわけではないので運悪くそういう蚊に刺されないと発症しない。人間は蚊に刺されても寄生することはないのでそういう病気にはならないので安心である。

そんな沈痛な思いで山本動物病院に行く。西八王子にあるのでタクシーで連れて行った。早速血液検査をする。ドキドキして待つ。ついにその時が来たと覚悟を決める。先生から「フィラリアではありません」と聞いて「よかった」と心から安堵した。そんな風に良かったーと心から思えるのは、受験の時以来な感じがする。結論は「白血球が高く出ているので炎症がある。咽頭炎か気管支炎ではないか。」との見立てで、抗生剤をもらった。1週間ほど飲むと咳は少し収まってきた。しかし、まだ相変わらず咳が朝夕に出る。一日中出ている時に比べたらずいぶんよくなつたがまだ心配は尽きない。今年の夏はとても暑かった。家から外に出さず、蚊には気を付けなくてはと散歩のときも「オニヤンマ君」に助けをもらいながら歩いたほど用心深くなった。

8月に再度受診に行く。抗生剤をもらって、これで治るか期待する。もちろんフィラリアの薬も真面目に飲ませることにした。しかし、ここからが大変だった。咳は続き、食欲が無くなった。散歩にも行きたがらない。暑さのせいだろうかとも思った。メス犬は年に2度発情する。ヒートというものがあって食欲が落ちる。だるいのだろう。体調がすぐれないのは人間も同じだからよくわかる。10月になってまだ体調が回復しない。ほとんど寝ているので心配になって受診に行く。薬を飲むと食欲が落ちるので抗生剤の注射にしてもらった。2週間効果があるという。そこから食欲が完全になくなってしまった。

紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」のHPに公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしています。

1週間以上食べない。水だけ飲む。ほとんど寝ている。もちろん散歩もしない。毎日そばで見ている方は気が気でない。自分がうつ状態になっていく。要するに何をやっても楽しくない。出かけていくのも気が重い。11月3日。もうこれ以上見ていたら骨と皮になって餓死してしまうのではないかと意を決し受診する。血液全検査。レントゲン。超音波検査。「あー、これは子宮蓄膿症です。すぐに手術ですね」「このままだと膿が全身に回ってどんどん悪くなる」手術しかないなら即決する。

ドクターの説明によると、子供の頃避妊手術をしないと（信頼する犬のブリーダー中田さん、から自然に生きることの大切さを聞いていたので避妊をしなかったが後悔はしていない。元気に生きる犬もいるからだ）この病は10歳を過ぎて老犬になってから発症することが多いそうだ。子供を産まないという確率が高い。犬は子宮がY字の形になっていて、そこに膿がたまってしまつて、普段は人の指くらいの大きさが腕の太さにまでなつてしまう。放置すると、血栓になったり腎不全になったりして命に係わる。症状として、よく水を飲むようになって食欲が無いのはそのためだった。この4か月の間に咽頭炎が長引いて免疫が下がりヒートの時期と重なってストレスになり発症したのではないかとのことだった。マルコは7歳になったばかり、若いから体力もあり、内臓もきれいなので今がいいのかもと思うことにした。病はいつ起きるか分からない。人も同じだ。山本先生は、犬と飼い主のことをよく考えてくれる良心的な先生だった。それは、この病院に通ってくるほかの犬の飼い主の方と待合室で話しているとよくわかる。立派な病院で高額な手術を勧めるところもあるが、犬と飼い主の気持ちに寄り添って治療してくれるので評判がいい。1泊し、爪まで切ってくれていて、栄養のある缶詰をもらい、エリザベスカラーまでもらった。今は若い先生（息子さん）と一緒に治療をしている。「2日ほど様子をよく見て何かあったら電話をしてください」「2週間後に抜糸します」治療費はネットで調べた相場よりずっと安かった。犬友達に聞くと保険のきかない動物は驚くほど高額なのが多い。大先生も元気でいてほしい。信頼のおける病院はなかなかないので貴重である。（2023.11.6）

マルコはよたよたして帰ってきた。麻酔が覚めて傷が痛いのかおとなしい。ヨーグルトを食べた。好きな餌を少し口にしたら。目やにがなくなった。心なしか回復の兆しを感じると自分の気持ちも軽くなった。「元気が一番」「健康が何よりの財産！」と実感する！それと、「タイミング」「人との出会い」全部かみ合つてマルコは助かった。長い闘病をして分かったこと大切なことにたくさん気付かされた。

マルコはかけがえのない存在なのだ♡

